

番外編

## INS 冬季講演会にて雇用構築学研究所の取り組みを報告

2012年12月8日午後2時より、盛岡市の岩手県商工連合会にてINS冬季講演会が開催された。INS＝岩手ネットワークシステムは、岩手大学、周辺自治体、そして岩手県の企業等が集結して組織した産学官連携団体。ここには紺屋博昭が代表を務めるINS雇用研究会という分会が存在する。

さて、INS冬季講演会では、多数のスピーカーによる共同研究のプロセスや地域企業の取り組みなどが報告された他、畑山悠希氏(鹿児島大学法文学部)がメインスピーカー、INS雇用研究会代表の紺屋博昭氏(鹿児島大学司法政策研究科)がサブスピーカーとして、雇用構築学研究所と雇用構築学ゼミナールの取り組みを「喜界島におけるケーススタディ～特産品開発、地域再生、そして雇用創出」と題し、発表。喜界島の様子、その特産品であり日本一の生産量を誇る白ゴマを活用した雇用創出の手がかり等を紹介した。畑山氏が進行し、時折紺屋氏へ疑問を投げかける“掛け合い”で会場を沸かせた両氏の発表を紹介する。  
(記録 石橋はるか)

□ 喜界島とは？ サトウキビ“ばっかり”だけど、注目の白ゴマ！

「喜界島に行って印象に残ったのはサトウキビ“ばっかり”ということです」と畑山氏は強調した。島には一面のサトウキビ畑が広がる。作付面積は島の耕地の約60%。島内いたるところに水を散布するスプリンクラーが設置されており酷暑でも生育可能だ。台風で倒れても自力で起き上がる。植えっぱなしで刈り取ればOKという、サトウキビは島農産物の絶対的エースで、島にはかかせない作物だ。

島が期待している特産物もある。一つは潤命草(ボタンボウフウ)で、美容・健康効果が期待できるとして栄養・美容ドリンクが開発されている。役場は粉末にする新設備を導入しようとしている。

サトウキビ農家が間作として育て、日本一の生産量を誇る白ゴマも注目すべきである。「日本で生産する白ゴマの99.9%が喜界島産。ただ日本の消費する白ゴマの99.9%は輸入で、残りが日本産となっています。収穫期に島を訪れると、ゴマ束を道脇で干している様子が見られ、セサミストリートと呼ばれております」。間作として作っているため、農家にとって白ゴマ生産は小遣い稼ぎ感覚。秋の貴重な現金収入といった具合だ。農協を通さずに出荷する。台風が来れば倒れてしまい、出荷できなくなるので、生産が安定しないという問題がある。「肥料は一切なくても育ち、基本は無農薬での栽培です。そして貴重な農産品資源ではありますが、島内外でゴマ栽培研究は全く進んでいません」と紺屋氏は説明した。

「白ゴマの関連商品を持参しました」と会場にゴマ黒糖、ハイグレードセサミオイル(=GOMAKASHI)などを紹介しつつ、ゴマを売り出していくには難しさがあると指摘する畑山氏。主役となる料理がなく、食材としての存在感がない。(冬季講演会のオーディエンスはバリバリとゴマ黒糖を食していた!) 輸入物に比べて価格が高く、そのままでは売れない。「喜界島産ゴマのおいしさを理解してもらうことが必要です。島のガイドツアー兼ゴマツアーの展開を提案します。収穫、乾燥、脱穀、加工、試食という過程を見てもらうことで、食育や健康ブームなどに訴えるツアーになります。今年はプレゼン、来年には私がこのツアーを主催し、実現にむけて努力したいと思っています!」とアイデアを披露した。



□ 地域再生と雇用創出の手がかり 白ゴマをどう活用するか？

喜界島産白ゴマの価格は高く、ふんだんに使えば商品の最終価格は高くなる。ゴマ本体が高いなら関連物はどうか。「島の農産物加工センター研究員が、ゴマ油の搾りかすには香りも栄養成分も含まれているのに、活用方法がわからないのが悩みと言っていました」と紺屋氏。白ゴマではなく、破棄されてしまうゴマ油の搾りかす「ゴマカス」を利用して商品にできないか…。

畑山氏は「ゴマカスを食べてみようかと串揚げにしてみました。粒が膨らんでゴマのようになりました。風味もしっかりと出て美味しいです」と紹介。これは“利休揚げ”という伝統的な料理方法でもあるらしい。利休揚げはもちろん本物のゴマを使うから、正確に言えば利休揚げもどきだ。

さらにゴマの搾りかすを煎ったものをすりつぶすと「きな粉のようになります。6日に島民に紹介したところ、とても好評でした」とも話した。これに黒糖をすりつぶしたものとブレンドし、なおオリジナルスパイスを混ぜたものを「アイランドシュガー」として喜界島での振興会議で紹介したところ大好評で、サンプル試食品は島の関係者に持っていかれたらしい。

□□□

では、過疎や高齢化などの問題を抱える島の再生とは何か。あるいは雇用構築学ゼミナールが目指した「振興パッケージプラン」とは何か。

「町役場の企画課長は『現状維持を第一に島民の幸福度をいかに上げるか』だといいます」と畑山氏。現状を維持したいという島民は多く、守りの姿勢がある。とはいえ島人口は10代から20代が極端に落ち込み、守りを固めることにも限界があると意識する住民はいる。

島に雇用がないから、島外へ流出してしまう。そもそも島にハローワークはなく、事務代行する役場も求職者数を正確には知らない。求人数もわからない。だいたい求職者は2012年の12月現在で島内にて60人位だろうと紺屋氏は見立てる。「人を探す事業主が内々に声をかけるケースが多く、そのほうが島の社会はうまくいくそうです。じゃあいい子にして就職があるよとの声が掛かるのを待っているしかないのか？ いえいえ、マスではなく小さな単位で新たな雇用を作り、島の若者と求職者に提供する必要があるでしょう。ここまでは島の皆さんも一応納得してくれる。じゃあということで、白ゴマと農商連携のパッケージ事業のプランを提案しましたが、島の人にはまったくウケませんでした。それに若者はそもそも雇用創出事業対象じゃないんですね。雇用保険を掛けて失業した求職者ではないんで、若者対策で国の雇用創出事業を活用するというのも支障がある」と紺屋氏は苦言する。

畑山氏も「島には根強いルールがあります。どこまで踏み込むかのバランス感覚も必要」という。「島民の幸せ、島の人口減少を食い止めるためにも、継続的に活用できるような能力の開発、人材の育成、島の発展に資する地域に根差した産業を深化させる取り組みが必要であり、官、民、島民がからみあってみんなで力を合わせて地域に根を張る。そうすれば、島のカジュアル(=からまる)のように、大きな木になれるのではないのでしょうか」と最後に訴えた。

会場にてお見受けした岩手県副知事の上野喜晴氏は、なんと鹿児島市にあるラ・サール高校ご出身。発表後、私たちの成果報告と研究の今後に対して、激励して下さった。



## ■ 事業成果および提言

### □ 1 白ゴマ活用に関する総合振興パッケージプランについて、

特に人材輩出および雇用創出について

国の事業スキーム等の活用等を通じた白ゴマ活用雇用創出案(＝総合振興パッケージプラン)については島の関係者の関心を引き出せず。また、白ゴマ関連物の活用だけで雇用を創出したとの島内意向は確認できず、あるいは白ゴマ活用のみで雇用を形成できるかについても不明。

白ゴマ生産、加工、そして流通販売の各シーンで雇用創出の手掛かりをなお探求するという点で島の皆さんと合意形成。この領域の人材輩出も同様に今後の課題。

白ゴマの総合研究に携わる人材は不可欠であり、農産品加工センターで白ゴマ絞り体験や加工試食体験をする児童・生徒を増やしてみるのが当座の一案。次に島を訪れる観光客に体験作業をしてもらう中期ビジョンを具体化。両方ともシード＝種まきである。

### □ 2 白ゴマ活用による特産品開発について

現状、白ゴマの「搾りかす」は廃棄物扱いであるが、活用可能性は高い。当事業においては、有識者および飲食業界の関係者らと試行錯誤を経た上で、次の2点の開発成果を得た。

1)「絞るかす揚げ」すなわち利休あげもどき。ゴマ揚げより柔らかく、かつ香り高い串揚げが可能である。

2)「アイランドシュガー」すなわち黒糖&絞るかすクラッシュパウダー。トーストなどにふりかけられるよう、ミニスパイスボトルとして梱包。後者はブランディングになお消費者フレンドリーな工夫が必要。島の皆さんに後者は好評。今後の具体的商品として、島の皆さんが中心となって開発プロセスへと進展。写真は沖永良部島のミックススパイスと並んだ「畑山商会 黒糖ゴマカス アイランドシュガー試作品(右)」。



なお、振興会議ではゆるキャラ活用を通じた特産品セールスなどの提案もあったが、きぐるみとしてもアニメーションとしてもこちら側の提案は未完成。また商品展開が未確定ゆえ、島全体の

イメージキャラクターとしても展開可能性は低い。

□ 3 白ゴマあるいは喜界島の農商資源に着目した観光振興について

上記 1 で触れた通り、現状の白ゴマ生産過程は人力に頼る割合が大きく、自動機械に頼るシーンは少ない。また、他の農産品、たとえば柑橘類の収穫でも同様である。ここに着目し、収穫体験や加工体験を味わえる農商観光体験ツアー等の具体化を提案し、島の皆さんに好反応を得た。白ゴマ以外にもレアアイテムの宝庫である喜界島。農産品のほか、「水資源(=地下ダム、島内スプリンクラー、島内自然湧水源)」にも注目した島内ガイド付きツアーを提唱。

今回の振興会議(=学習会)では披露適わなかった「俳句ツアー、歳時記作成ツアー」などにも可能性が。これらも今後の観光資源再発見のためのシード=種まきである。

## ■ 鼎談 アイランドキャンパス事業の細部へ

おはなし 石橋 はるか 雇用構築学研究所  
おはなし 畑山 悠希 雇用構築学ゼミナール／先端研究ゼミナール  
ききて 紺屋 博昭 雇用構築学研究所

### □ チーム構成

みなさん、こんにちは。事業遂行お疲れ様でした。大学で受けて学生団体の実施する学習だの研究だのは、たいてい女性の実力が上回っているのが相場です。この鼎談は、もちろんこのたびの事業実施でお力をいちばん発揮して頂いた方にお話を伺う趣旨です。お二人とも実力者たる事業遂行所の女性というワケですね。

石橋 実力もちろんですが、研究をしたいかどうかの意欲が大事だと思います。私の場合、実力はないですが興味や研究への意欲はあります。事業遂行には研究意欲が必要。ただ、大学に研究をしにくる学生はいません。ほとんどの学生にとって大学は就職のための通過点。ですので、「大学は研究するところ」と学生に教え込むことが必要でしょう。

そうですね。きっかけを頂きましたので、事業遂行団体について情報補足をします。私は、大学の事業所として「大学院司法政策研究科」に所属しており、これは通称ロースクールです。昨今とみに評判が悪い組織事業所として、つまり司法試験予備校なのですが、この予備校の学生は国家試験の司法試験にちっとも合格しない。きっと所属教員が悪い(たぶん)。さて「司法政策研究科」の所属教員は、昔「法文学部」組織を割って出た経緯があり、根拠もないのにその学部の授業やゼミナール指導も一部引き受けたりする。もっと専門に集中すれば合格者が増えるかもしれなのに(笑)。2010年4月に着任した私は、その後、学部のゼミナールや授業をやってくれと学部二要請されたものですから、仕方なくやった。やんなくてもいいのだろうけど。ま、学部の教員が割られて残ってるのがもうほんとアウトな感じなんで、義侠心という感じ(言い過ぎ)。もちろん山中教授のように「うちのゼミナールにぜひ入ってくれ、世界的な発見ができる楽しい研究ができる」とかは所属の全く異なる学部生に言えないし、そんな機会もない(笑)。で、ネット情報見て、「あーなんかぬるそうな教員だからとりあえずみんなでこのゼミにエントリーしようぜ」などという学部生が10人定員程度そろってしまった、という状況です。

石橋 主幹は前任校ではそのようなチームというかゼミ構成を忌避していました。ゼミナールを希望する学生を選抜し、やる気のない学生は受け付けなかったのです。「ボンズどもとは何もできない」とか言って、やる気のない学生は「ボンズ」呼ばわり。いったん所属したのに、ゼミ変更させられた学生もいます。なので、今回のゼミナールを指導することになった当時も、「勉強を教える気はない」「一緒に研究する気もない」というような話をしていました。

まあしかし大学のお客様でございますから、ムゲにはできません。集まった学生には、「俺様が教えることは何もない。いまだき教員からモノを学ぼうという初等を大学で実践したいとも君たちは考えておらんだろ。従って君たちは世間からモノを学ぶ。ついては行政の事業を大学に引っ張ってきてゼミとして事業を遂行して活躍した学生に単位をやろう。それが大学での高等な学習だ！」と伝えました。そしたら私からモノを学びたくなかった野添君が、2011年6月ごろにアイランドキャンパス事業なるものがある、これに応募したいというので、「おう、ぜひやれ」という具合です。

石橋 ゼミナールは座学の間ではないということですね。でも、「ぜひやれ」と言われて、簡単に事業が通るものではないでしょう。テーマ選びに試行錯誤したのでしょうか、野添君と主幹は、どんなテーマで事業エントリーしたのでしょうか。

「労働法を教える」というテーマじゃなかったかな(笑)。労働法も習ったことがないのに<sup>1</sup>、学生の間際によく島に出かけて島民に教えるとか言えますよね。下手すると殺されるんじゃないか？ ま、寸劇とかを交えて、島の若い衆に本土の雇用の恐ろしさを伝えるみたいな内容だったかと。さすがにこんな内容じゃあコンペで落とされると思ったんで、「少しは島のニーズを探ったら？ ついでに事業実施主体に、どんな選考基準でどんな事業成果が欲しいのか尋ねてきたら？」と野添君に言いました。そしたら本当に島に行った。「喜界島はいままでアイランドキャンパス事業の対象の島になってないので、狙い目だと思います」という不埒な理由だったと思います。で、喜界島にいったけど、なんだか呑んで騒いでおしまい。結局、薩摩川内市の甕島にも県庁事業の喜界島対象のものも、労働法を教えるテーマでエントリーして、あえなく落ちてますね。当たり前だ。

石橋 腰を軽くし、どこにでも出かけて行ったほうが得をする。私が大学時代に学んだことです。主幹に言われたとはいえ、島に行った野添君の行動力は素晴らしいと思います。ただ、飲み会で終わってしまい、ニーズを探れなかったのは残念。でもあきらめず、今回もまた応募しようと思ったのですよね。

野添君とその友達何名かで島に行くために小遣いをいちおう渡してる私ですので、事業に通らなければ投資の回収が出来ない。残念と言えば残念だ。さてまあ、どうしたものか、と考えて1年がたった。そうしたら、野添君のバイト先の寿司屋に、喜界島でお知り合いになった方がたまたまお見えになって、「野添君、また島に来いよ。あの計画、今年も出せよ」と指導が入ったらしく、相談にやってきた(笑)。

石橋 では偶然の再会が、応募への再チャレンジへと結びついたということですね。面白い。さて、今度は応募のための別のテーマを考えなくてはならなかったのだと思いますが、何か案はあったのでしょうか。なぜ、雇用創出や地域再生というテーマを選んだのでしょうか。このテーマって、どこかで聞いたことがあるような気がしたのですが。

<sup>1</sup> 鹿児島大学法文学部には「労働法」という科目が存在しない。近接類似科目に「雇用の法と政策」という科目があるが、担当教員は非常勤講師。最近ようやく主幹がこの科目を担当するよう学部に依頼されている模様。しかし主幹は、「学部の意向はよくわからんし、就職活動のためには労働法なんて勉強しなくてもいいし」などとわがままを言って、ごく単年度しか担当しない。もったいない話(誰のことって?)。

私の科研費の題目をちょっと流用しました<sup>2</sup>。ただ野添君は、律儀にまた喜界島にフェリーに乗って行きまして、喜界島商工会へのリサーチで「いま喜界島は白ゴマでブレイクしようとする」という断片情報を得てきた。そこで、喜界島で特産品開発、特に白ゴマを活用した地域再生、雇用創出、観光資源化というアイデアが形成されたワケです。喜界島を対象にしたのは、島に何度か行って島の皆さんとすでにいろいろやりとりしてる。だから事業成果の達成は可能性が高いというアピールになりますでしょうし。またテーマもわりといいじゃないですか。

石橋 白ゴマの情報を得られたのですから、やはり腰は軽いほうが得をしますね。そして事業は通ったのですが、それだけで満足しては意味がありません。大事なのは事業遂行です。しかし今回はそれがうまくいったとは言い難い。島に行ったチーム構成にも少々問題があったのではないかと…。

そうですね。野添君は自分の友達にお願いごともできないガラスの少年なので、今回連れてかれた二人も実際なにしていかわからないだろうし、考える能力もないでしょうね。どっちかは「飲み会要員だ」という話だったかと。事業遂行にあたって最低5人いないと事業能力を欠いて欠格団体となるので、実は畑山さんがいないとホントにアウトだった。

畑山 私は最初、なぜ自分がこのチームに招かれたのか、まったくわかりませんでした。

雇用創出や地域再生というのは、学生の手に余る。しかし野添スキームでは白ゴマキャラクター化、白ゴマエコツーリズム、白ゴマ雇用という線で、事業計画書を書こうという。実際ほとんど私が書きました(笑)。あまつさえ町村会から事業当選通知の前に電話がありまして「学生が島の農業を手伝ったり、収穫作業と一緒にする計画はないのでしょうか？」と指導教員役の私に訊ねてきたりしたので、「ありますあります。すぐに追加事業計画書を出します出させます」などと口走った経緯もありまして(笑)。こうなると収穫の秋にボンズたちを島に行かせて、「収穫したどー」と叫ばせるしかないかなど。が、そのボンズたち、誰も行こうとしない(笑)。結局ね、誰も大学でちょっと変わった方法で、将来につながる体験と学習をしようとは思わないわけよね。

石橋 これじゃ、だめだと困った主幹は、その実力を見込んで畑山嬢を誘いました。なんせ、野添君がゼミナールの学生に呼びかけても誰も参加を希望しなかったと聞いています。鹿児島大学は「進取の気風にあふれる総合大学」というキャッチフレーズもあるようなのですが、なぜでしょうね。

まあ、そんな大学の内部でいちども聞いたことないです。ということで、この事業は私が前のめり気味で、ボンズどもは役に立たずというのが反省点。それをサポートしたのが、両女性ということで、貴重な成果も提供してくれたということで。

---

<sup>2</sup> 研究主幹の今年の科研費は基盤Cで「雇用政策事業を有効具体化する法技術—地域（雇用実現の法）を構築する—」というテーマです。

□ 白ゴマ活用諸策で雇用創出は可能か？

畑山 主幹は「君は労働基準監督官になるそうだが、労働局の労働基準を仕事にする前に、職業安定のほうで雇用政策をやってみる気はないか」とこの事業に私を誘いました。実際、鹿児島労働局の職業安定部に実践型パッケージ事業の取材にも一緒に行きました。

私の考えるようなことは、すでに島のプレーンや国の役人(とその受託事業者ら)が考えているに違いない、だから白ゴマを活用した地域振興プランや雇用創出アイデアがすでに島の関係者側にあるのではないかと邪推し、まずは労働局に雇用関連予算の請求が喜界島から上がってないかどうか探りに行った。

畑山 驚くべきことに全く無いそうなのですよ、事業を活用したという過去の実績が。むしろ活用するように説得してきてもらって構わないというお話でしたね(笑)。

喜界町は健全財政で、国のハコモノ系予算やキワモノ系予算に手を出さず迂闊を慎重に避けている。雇用関連予算といっても、あやしい事業者への受託のメンドウがあったり、つまらない事業者向けセミナーを開催せざるをえなかったり、制約が多いことを知り尽くしているのかもしれない(笑)。なので、今回は、私のほうが、パッケージプランを作ってプレゼンしてみるという苦悩があった。誰も聴いてくれなかったけど。つまり、説得や勧誘は失敗(笑)。

石橋 パッケージプランのつまらなさを日ごろ批判している主幹が、自分でそれを作るという矛盾は、いかがでしたか？ しかも誰も聞こうとはしない事情がある中で。

これはね、ホント大変でしたね。まず島にあるわずかな資源で、求職者向け就職セミナー、事業者向けの商品開発セミナーをやらなきゃいけない、しかも東京あたりにいる「パッケージ向け受託事業者」をなるべく呼ばないほうがいい。とはいえ、島に億単位で会計勘定を担当して、事業を振り分ける能力を有する団体があるわけもない。あらためて雇用創出事業というのが「専門事業者向けお金落とす事業」なんだと実感した。

畑山 そのような事業であっても主幹は「目的、方法、効果の見積もり、総合策を作っておくのは、島の基本計画や将来方針になるから、やったほうがいいし、やらないのは損だ」という見解でしたね。

島の現有資産の確認と整理になりますからね。私が確認してどうするという話もありますけど。本当は学生さんがこの計画を作ればいいんですけどね。かつての松下政経塾とか、いまの橋本維新塾とかでは政策形成実践やってんのかね(笑)。ともかく、サトウキビ島にて、サトウキビじゃなくて白ゴマのみをフィーチャーして創造計画を策定するのはなかなか大変です。白ゴマ生産、出荷、流通、加工、そして商品化に関する島の構造が見えない／見えずらいという問題があり、表層的な「白ゴマ&島のレアアイテムを活用した農商振興セミナーや人材育成セミナー」という枠組みしか構想できませんでした。



石橋 パッケージ事業には地域協議会という組織が重要だったはずですが、島にはないのですか。

たいていは役場か商工会が担当します。今回は町役場にも商工会に取材アプローチをしましたが、どうなんでしょうね、ある意味健全な中立性がありましたね。つまり、金を回すことだけが好きな人物が町役場や商工会を担っているわけではない。雇用創出事業の協議会形成も、協議会運営にも、いまの町役場や商工会のスタンスでは「ちょっと遠い」感じでしたね。白ゴマ生産や流通加工が、そもそも島独自のものというよりは、島外のなにかに支配されているので、協議のしようがないのではないかという直感を得ました。あるいは島内の雇用そのものが、さして懸案でなく、協議のしようがないマターなのではないかという実感を得ました。

畑山 島が求めているものを押し売りするというのは、研究事業として誤りでしょう。しかし、島が気づいてないものを、処方箋を添えて情報提供するというのは重要です。島内の雇用はこの両方に配慮しなければならぬテーマです。

今回事業を遂行して(私が)よかったなと思うことは、喜界島では無理して雇用を作ろうとは今のところ誰も思っていないという現状を理解できたことです。雇用保険勤定制度でいうところの求職者は、月30人から50人程度。役場が認定事務を代行するのですが、「全員が食うに困っているようには見えません」と言っている(笑)。労働行政でさえ喜界島に求職者、失業者が何人いるかわからないので、雇用は問題になりようがない。でもまあ、沖縄だって鹿児島だって、数字は悪く、特に島嶼部で下げている訳です。何年か前に問題になった「派遣くん、派遣ちゃん」問題が復活する危険くらいは理解しておいて、島外に出てもいいけれど、島内で妥当な水準の賃金でそこそこ働けるような用意しておくのも悪くないですね。そのための雇用レベル、労働条件レベルを考えておこうというのが、われらが研究所の事業目的なのですが(笑)。島の皆さんからすると「大学が来てるのに、雇用の作り方ノウハウひとつ紹介していかないなんて、一体どんな連中なんだ？」という実感でしょうね。雇用の作り方ノウハウというのは、IPS 細胞の研究並みに困難なんです(笑)。

石橋 島が求めているのは、白ゴマを活用した商品が開発でした。雇用を生まなくても問題ない。どこの自治体でも、雇用の創出は二の次にされているように思います。継続的な雇用が生まれにくいのもそのせいでしょう。

畑山 白ゴマを自主出荷して島生産ブランド化商品(=白ゴマ油)としている生産農家の杉俣氏のところでは、すでにNPO 法人生産を見通した雇用が発生しているらしいです。雇用の萌芽として、追加取材してみるのが面白いと思います。また、花良治(けらじ)白ゴマというブランドで白ゴマ油を生産しているティダワールドさんは、大島のハローワーク経由で島に求人を出している。生産加工じゃなくて、飲食店舗のほうですけど。ゴマが雇用を生み出さないと短絡する必要はなく、もう少し細部を見ていけば良いのではないのでしょうか。

□ 畑山登場と白ゴマ観光振興パッケージプラン

なんで登場したのか本人もよくわからないと言っていました。鹿大の通常レベルを超えた優秀な学生がいるとの情報を得たから、使うしかない(笑)。単位の出ないインターンシップ企画にも積極的に参加していたから、誘えば来るだろう<sup>3</sup>。だいたい例のあのゼミナールがもうほんとひどいからね、この事業を進めるのには外部の助っ人が必要だろうと前から考えてました。

畑山 台風で10月に開催する予定だった振興会議が12月に延期になり、その連絡などは全て主幹がなっていました。「ははーん、この研究チームは学生が事業を進めるというより、主幹がごく一部の人間を使いながら強引にやっちゃうのだなあ」と感じました。私は京都で観光ボランティアガイド経験があり、白ゴマを作る長崎県五島にルーツがあるので、かねてから白ゴマとグリーンツーリズムに関心がありました。ですのでこの事業に声をかけていただいた時、「おもしろそう！」とワクワクしましたよ。あと、県庁を受験する時に話せるエピソードができるなあというヨコシマな考えもありました(笑)

で、畑山さんは私と11月に事前取材に行く訳です。白ゴマというよりは、観光資源確認の意味合いが強い取材でしたが。

畑山 喜界島にはボランティアガイドによる集落ツアー「よんよ〜りシマ歩きガイド」があって、事前に申し込めばガイドさん付きの集落観光ができます。ただ、それだけだと受動的な体験しかできないと感じました。せっかくフェリーで12時間かけて訪れる南国喜界島なのに、もったいない。集落と集落を結ぶ農業体験や加工体験、それに販売体験ができれば、新しい農商観光プログラムになるのではないかという着想を得ました。

石橋 私が9月に島に行った時はとても天気がよく、きれいな海が印象的です。南国だなんて。晴れていれば、歩くだけで雰囲気を楽しめるという気はしますが、それだけでは観光客はこないかな。

畑山 天気はポイントです。集落ツアーも収穫ツアープランも、雨や台風にも弱い。悪天候の日、どうやって観光客を楽しませているのか、少し勉強しなくてはなりません。その点、島にいくつも存在する廃校をもっと活用できればいいなと思いました。

せっかく俳句ツアーや歳時記作成ツアーなどをプランニングしたのですから、トライアル試行版ツアーくらいやっておけばよかったですね。これが手軽にできないという問題ももちろんあるのですが。つまり引き受け団体が無い。

<sup>3</sup> 畑山氏は鹿児島市出身で、小さいころからお勉強ができたので鶴丸高校という名門校を経て、同志社大学という京都の私学に進みましたが、なぜかあまり大学へ行かずぶらぶらしておったそう。本人いわく「そりがあわない」。そして中退して、しかしそれでは高卒になるから鹿児島大学に編入してみるかと試験を受けたらなんなく通った。編入試験担当の教員から『労働法を勉強して労働基準監督官になりたい』という学生がいたけど、労働法のゼミはないんだって知ってがっかりしてたよとの話を聞いた主宰は、ひょんなことから大学の制度に乗っからない鹿児島労働局でのインターンシップ体験事業を自主企画し、畑山氏が応募するよう人づてに工作した。そしたら畑山氏はまんまとこれに乗ったというお話。

畑山 短冊まで持参して喜界島を訪れましたが、こちらが調査取材しているうちは心を安らかにして俳句を詠むというところまでたどり着きませんでした。時間が止まったかの様な、自分が何者にも特定されていないような不思議な感覚は味わえましたが。南の島の自然を観察して歳時記作成というのは、アイデアとしてはいいんじゃないですか。四季の移ろいが本土と全く異なる南の島で季節を感じるというのは、なかなかおもしろい試みだと思います。

12月31日だとどんな歳時記になるのかしら。

畑山 さあ、わかりませんね、行ってみないと。なにせ喜界島には独特の慣習があります。きっと私達が想像するような大晦日ではないのでは。お盆にはお墓で飲み食いしたり、集落全員のお墓参りをしたりするそうですから。こういうところも島のおもしろさですよ。

俳句にしろ歳時記にしろ、高等な知性と感性をもった指導者が必須のようです。しかも単体での企画はちょっと難しいかな。既存の集落ガイド付きコースに、短冊を押し売りして俳句をひねってもらい、フェリー乗り場に貼るとかさ。

畑山 野添さんたちは喜界町商工会で「白ゴマ」情報を得たからといって、次の日農家に出かけて白ゴマについて尋ねてみるということではしなかったんですね。正直、もったいないなあ。今回は観光については私だけが担当して振興プランを作りましたが、もう少し違った角度から島の観光資源を再確認する作業があってもよかったです。

せっかく島のフィリピンパブにつれてってもらってるんだから、「おねいちゃんのお国でもゴマはあるのか、どうやって作るか知ってる？」と会話を楽しみ情報を聞き出すのがいいですよ。でも実際どうなのかね。異国のおねいさんに焼酎作ってもらって酔ってカラオケ歌ってんのかね？とって、君たちを私はパブに連れて行って教育したりはせんから安心したまえよ(笑)。それはそうと、喜界島で『国際ゴマ会議』を実施するとか、別の産地国と『ゴマ友好協定』締結とかやればいいのにね。やれば生産研究とか商品開発とか地域交流とか留学生派遣とか進展あるかもしれんよね。てなことは報告書本体にも振興会議にもなんにもアイデア出なかったな。

畑山 そういえば「日本ゴマ科学会」なる、大学の先生やゴマ業者が会員の組織があるそうです。こちらからお知恵を拝借するということも可能かと。

石橋 白ゴマのことはまだまだ明らかにしたいことがたくさんあります。生産から加工、流通までどうなっているのか、胴元といわれる存在の買い付け主がやってきて、どんな基準で値段をつけているのかは結局わかりませんでした。

調査部隊があと何名かいればね。いいんですけどね。しかしね、こういうのをおもしろがれるのは100人に一人くらいだ。

畑山 こういう逸材はゴマンといませんよ。それはそうと、白ゴマ学習会＝振興会議は、「あれはよかった、いままでこんな企画なかったし、大学生が島にやってくるって勉強するという趣向は今後も続けたほうがよい」との声がたくさん聞かれました。飲み会と事後アンケートにもそういう声が出ていましたね。

それは私も飲み会で教えてもらいました。島の皆さんに歓迎してもらえたなら、アイランドキャンパス事業は成功です。だって島嶼地域を舞台に、学習活動を展開し、島民交流を図ることが達成できたわけですからね。ただ我々はその上の成果の確保と、次への展開具体性が欲しいという(笑)。なんて欲深い『研究団』なのかね。

畑山 「次は喜界高校の高校生を交えて、一緒に島の将来を考えよう。その時の素材がこの白ゴマだ」という声を頂きましたよ。確かに、役場のプレーン役や地域経済の実力者のみならず、次世代の人材とこうした調査研究活動をするのは断然おもしろいと思います。卒業後ほとんどが島外で就職する彼らが、その現実をどう受け止めているのか本音を聞いてみたいですし。

石橋 島の高校生がどう思っているかはすごく気になります。島をどう思っているのか。イメージですが、若者にとっては東京などで流行しているモノが手に入らない地元を悪く思ったり、離れたいと思ったりしているのかなど。いや、単に私自身の高校時代を思い出してみると、とにかく実家(＝北海道函館市)を出たかったので。私は地元で就職、進学という意識はありませんでしたし、雇用が生まれてほしいとも思っていなかったはずですが。でも高校生を研究に参加させるとして、いきなり大学の先生や学生がやってきて、「さあ島には雇用はないんだけど、どう思う？意見を述べてください」と、言われても困るでしょうね。一緒に研究しましょうは難しいそうなので、私たちがインタビューしてみることになるのでしょうか。でもできれば高校生たちに島の大人にインタビューをしてもらって、世界観を広げてもらいたいかな。これも冒頭で述べた興味や意欲の問題になると思いますが、興味を持つ高校生をどう集めるか。うーん、興味を持ってくれる高校生っていない気がします。

まあ、じゃあそれを課題としましょう。今後のアイランドキャンパスは、地元の高校生との友好を必須条件とし、ゼミナールメンバーに加えて共同研究を進めるってことで。あと、参加する大学と大学生は、高等教育とは教科書に書いてない世の中の構造を調べて改善策を提案するってことを高校生に教えるのが義務になるとかさ(笑)。

#### □ キラーアイテム「畑山商会 アイランドシュガー」

石橋 農産品加工センターの輝氏からゴマ油の搾りかすをもらいました。「これを何かに使えないか考えているんだけど。たとえばお茶にして飲むとか。栄養価が高いからか、肥料にすると食物もよく育つかも…」というお話でした。放っておけば破棄されてしまうカスを活用できれば環境に優しいエコ。材料費などもかからないですし、雇用の創出に結び付くかもしれないと思いました。どうでしょう。

すごく香り高くてね、研究室がゴマの香りになった(笑)。飲食店の玄関とか寺院の入り口に置いておくといいんじゃないか、雰囲気出て？そして持て余したので、畑山氏に譲った(笑)。

畑山 もう本当にヒドい話で(笑) 私も扱いに困って、しばらく家の階段に放置していました…。搾りかすの最大の欠点であるボソボソした口当たりを活かせないかと、串揚げの衣にしたら結構おいしかったのは、紹介したとおりです。

ゴマを使った揚げものが利休揚げだそうなので、なんだい、ゴマ搾りかす揚げをキュウリ揚げとか言ってみる？なんで利休なのかそもそもわかんないけど<sup>4</sup>。

畑山 糟(かす)という字から「ベアソー揚げ」なんてのもどうでしょう。南国っばいでしょ、響きが。搾りかすにどれほどの栄養があるのかまだわかりませんが、ゴマは種なので皮が丈夫だから、砕かないと栄養の吸収ができないとか。噛む力の無いお年寄りのために、特養施設などでぜひ使って欲しいです。

石橋 お年寄りにも優しいゴマカス。好評だったというアイランドシュガーの誕生秘話を教えて下さい。

おれっちは貧乏人なので、研究室で冷凍パンをオーブントースターで焼いて、そしてマーガリンを片面にさらりと塗り、ブラックチョコレートの断片を落としたり、とろけるチーズをのせて再加熱したりする。おれっちがさらに貧乏になると、チョコもチーズもなくなり、ガーリックトーストやシナモンシュガーといった小瓶のスパイス調味料をトーストに振りかけて食べる。おれっちより貧乏なはるかさんは、冷凍パンのまま食べているという。

石橋 もともと保存用に冷凍していたものを焼かずに食べてみたのがきっかけですが、おいしいですよ。フランスパンのように固くなって。特に暑い夏に食べると体を冷やしてくれますので、南国の皆様には特におすすめです！

すごいね、あんた。小瓶スパイス調味料、いま流行ってるじゃないですか(思い込み)。で、シナモンシュガーの小瓶が空になったので、「畑山さん。黒糖とゴマの搾りかす、すり鉢で摺ってこの小瓶に詰めてきて」と言ったら、「嫌ですよ、自分でやってください！」と言われたという(笑)。

石橋 なるほど、研究室で食べる食パン用の味付け用だったのですね。でも作ったのは畑山嬢？

畑山 そうですね。結局私在家でやりました。黒糖は堅くて砕けないし、なかなか摺れない。手は痛くなるし、家人に「うるさい！」と言われるので大変でした。メンドウなので小瓶も洗わず(笑)。

<sup>4</sup> ゴマをまぶして揚げたものやゴマ油を利用して揚げた料理の総称。千利休が好んだとされるが出典不明。

なのでシナモンシュガーの香りが高く、落ちないので、ゴマの香りがぜんぜんしないのね(笑)。こりやあま  
ずい、ってんで、ふたの部分だけはシナモンを落として、ゴマの香りが鼻に届くように改良。ラベルははが  
して付け替えた。題して畑山商会アイランドシュガー。振興会議の前々日に完成したのではないかと。

畑山 パンに振って食べてみると、新しい味だと思いました。なので、自信を持って島に持参したんです。  
振興会議の席上でも、皆さん手に振って真剣に食べていましたね。あれは忘れられない光景です。

石橋 そこまで好評だと、商品化できますかね。これが研究成果の一つでしょうか。

畑山 「黒糖とゴマの商品は今まであったけれど、シナモンをブレンドするのは考えてなかったな。この  
小瓶、置いて帰ってください」ですって。パテントのこと勉強しておけばよかったなあ(笑)。喜んで頂ければ  
確かにアイランドキャンパス事業の成果になります。本当にワンオフなので、私の手元にはないのが残念なで  
す。

なーに、チョコ、シナモン、バニラ、ストロベリー、メロン、唐辛子とこれから一通りやればいいのよ。文系で  
もアイデアとちょっとした手作業で、産品開発ができるという先例ができて満足ですね。小瓶だとお土産と  
しても手軽だし、冷凍パンと抱き合わせで流行るのでは？

石橋 冷凍パンのオチは嫌です。町の農産品加工センターに宿題をもらって、宿題を果たしたという事業  
成果オチがいいのではないですか？

畑山 ところがどっこい。振興会議の翌日加工センターを尋ねましたら、新しくゴマ搾りかすを頂戴したん  
です。なので、宿題が増えるという結果に。こうやって3人で一応包み隠さず事業報告として細部を語まし  
た。そして研究というか宿題はまだまだ続いている、次の課題を得るのが研究そのものなのだというオチで  
終わりにしましょう。

(いしばし はるか)  
(はたやま ゆき)  
(こんや ひろあき)